

評伝

桃花塾長岩崎佐一先生 (三)

その人ととなりと事業について

会員 羽 柴 弘

前号であげたように、岩崎先生が津井尋常小学校の雇
教師となつたのは明治二十六年七月、今日とちがって、
佐伯から通勤するまで、到底出来ない時代であつた。当
時だけでなく、大正・昭和になつて鉄道が開通し、交通
が便利になつても、学校教員は任地に居住することが立
て前となつていた。だから、当然のこととして、青年教
師岩崎先生は津井に引き越し、「学校の先生」としての
生活にはいり、時々、土曜日午後陸路を歩いて帰り、
日曜の午後、今度は船便で学校に帰る、そんなことを繰
り返すこととなつた。

津井尋常小学校で、十七才の岩崎先生は何年生の担任
であつたか。今の私には津井に行つて、もう七、八十才に
達している当時の教え人をさがすゆとりがない。それが
可能であるかどうか怪しいものであるが、探して左に
してもその老人が、当時の岩崎先生のことをよく思い出
してもらえるかどうか。

それよりもかく、津井尋常小学校の教師となつた岩崎
先生は、時をたのむ日曜日、仲野三丁目の家へ帰り、母校
佐伯尋常小学校へ当時三のれにまつた、すぐ近くにあつた南
海部郡立高等小学校、そして夜学に通つた鶴谷学館を訪

い、旧師をたずねたことである。そうして岡本野矢歩
との出会いがあつたわけである。

この辺のことを、岩崎先生はその著「人間を生く」(第
二集)に、次のように述べている。

「私は大分県佐伯市の生れであるが、私の小学校時代
は、旧藩主が資を投じて、郷土の子弟のために、鶴谷
学館という漢学・英学・数学を教ふる私塾を設立され
た。

志のある者は当時の高等小学校三年生にもなると、
学校から帰つてその私塾に通つていた。時間割も勿論
学費と差支えぬようになつていた。漢学の時間は点燈
後であつた。可笑しいことをいふようだが、私は子供
の時から大食家であつた。それで晩食を済まして塾に
行つて、先生の講義を聴く時には、丁度睡気を催す時
刻であつた。従つて「春秋左氏伝」ならば春王の正月、
「史記」ならば蘇秦・張儀等豪傑の名前だけだが、耳
にとまつているだけで、何も記憶に残つていない。惜
しいことをいふたものであると幾度か後悔した。然るに
頼山陽の著である「日本政記」の臨講の時間であつた
かと思う。和氣清庵が彼の道鏡を叩きつけた破邪顯正
の行動を、頼山陽曰くといつて論評したその論文の冒頭
に「士は気節あるを尊ぶ。気節なきは士に非らざるな
り」といふ語に、睡気忽ち醒めて慨然たるものあり。
魂甚く躍動して、軟弱な頭脳に大きな印象を与えられ
た。

以来その魂が時に私を鼓舞し、時に私を激励し、私
の任務の上に多大の貢献をなしたらし、今日といえども
その魂は決して衰えない。(目書七八ページ)

いふ、か先生の文章の引用が長すぎたようであるが、
鶴谷学館時代の先生の勉学の様子か、よくうかがえると

思う。

岩崎先生はこのようなことで、高等小学校を明治二十五年の三月に卒業（略歴による）たが、学問に意欲を燃した先生は、尚引つづいて鶴谷学館に籍をおいていたのであらう。

その鶴谷学館に、

「都より一人の年若き教師下り来りて、佐伯の子家に

語学を教ふることほとんど一年」（司水田独歩著「源おじ」の書出し）

その独歩との出会いであるが、独歩は自面猶介、文学を身につけた二十四才の青年教師、岩崎先生は純粋佐伯生まれの、純情十七才の田舎教師、場所はず恐らく鶴谷学館のうす暗い教室、時は明治二十六年の秋であつたであらう。

私の脳裏には、新劇の舞台が浮かんで来る。二人はまずどのような挨拶を交わしたのか、どのような話のやりとりがあつたか、今は全く知る由もないが、私がもし劇作家なら、すぐにも一場面を描けるのだが、これは読者の御想像にお任せする外はない。これは今その跡形も留めていない鶴谷学館の、歴史のひとつである。

さて、岩崎先生は休みの度毎に、「浪太七坂」を歩いてはるはる四里の道のり。迎える家では母親が衣類も食べものについて何くれとなく心をくばつて、次の日に續いているとおぼしめて持たせ船に見送る。上瀬のおおしいは、内所川は本小路のおちりについていた。午後三時すぎ買物などに出てい左津井の人たちと一しよに、岩崎先生は任地に帰る。そのようなことが度々くり返されたことであらう。

（私は恐らくとかあらうとか、はげずであるとかで文章を綴っている。こんなことで人物の評伝が書かれてよいであらうか。故人に対する大きな冒瀆であると責められるで

あらうが、当然すといえども遠くないところを左どつて、当時の先生が身辺を綴っている次第である。）

このように土曜に帰り、日曜午前中がおいていた岩崎先生が、小学校や鶴谷学館に遊びに行くことは極く自然であり、その自然な動きの中で先生は、評判の國水田先生に出会い、その後度々独歩をその下宿、山際の坂水邸に訪れたことと思ふ。

そんなある日、独歩の下宿を訪うた岩崎先生は、独歩は一冊の本を示された。それは独歩に徳富蘇峯氏から贈られた、教育と遺伝、と題する本で、独歩は「自分は今読んでいる本があるから、君、先に読んで、貸してあげる。」と、一讀を先生にすすめるが、

喜んで借りて帰って読んで見ると、その中の「教育略史」に、ペスタロツチが戦乱で流浪していた孤兒院教育をスタンツの所に集め、有名なスタンツの孤兒院教育をほめたことが書かれてあつた。親も家も失つた貧しく汚れた孤兒たちと向き合ひ、聖者のような姿で愛情を傾けて教育に当たつた姿は、岩崎先生の心を強くゆさぶつた。——ということであつた。

さもありなんである。独歩が自分より先に読むことをすすめた相手がよくあつた。教壇に立つて日こそ裁かれ、純真一途に児童達の前に立つていた十七才の青年教師、その岩崎先生の心の琴線にふれたことは、充分うなずけることである。

教育の道を志していた先生にとつて、物心共に恵まれていない不遇な子供たちに対して、ペスタロツチの教育愛に、先生の魂がどれほど共鳴したことが、「故岩崎塾長略歴」には「——大いに感服し教育に志した」と述べてあるが、これは先生のライフワーク（生涯の仕事）とさ

れた精薄兒教育、桃花鑿の経営にながかるものである。

先生は翌明治二十七年十月、御自分の母校佐伯尋常小
学校の准訓導として転任となった。学歴と一か年以上の
教育実習によつて与えられた資格であった。何年生の組
任であつたか。その教え兒たちも、生きていれば九十支
に近いておるうから、これを探し出すことは困難である
う。そのころの岩淵先生はどんなであつたか、書いて見
たいものである。

今度には雇教師でなくて准訓導という、資格をもつた教
師である。津井小学校での教育実習が役に立つたこと
あるうが、何といつても正則の教員養成学校をやってい
ないことが、次第に教壇に立つことには不安を覚えたので
あるうか、師範学校入学を決意するに至つた。

母校に勤めること一年有半、先生は明治二十九年四月
佐伯尋常小学校の教師を退職し、数ヶ月勉強準備して、
同年九月、当時大分の町にあつた大分県師範学校に入学
した。当時の師範学校は全県ただ一校、明治九年の創校
であつたが、佐伯方面からの入学者は數えるほどしか
あつた時代であつた。

岩崎先生の師範学校時代の勉強生活は、どうであつたか、
先生の師範学校進学に対して、先生は家庭にどのような
ことを支援したか。先生は第六子であり、下に尚爺さん
達があつた。その当時の家庭事情も知りたいが、今急に
こればかりは得ない。しかし、とにかく専門の教員養成
学校に学ばようになり、教育学や心理学のような教職科
目はもちろん、国語・漢文・英語・数学・地理・歴史・
動物植物などの普通学科から國画・習字・工作・音楽・体
操などの技能教科に至るまで履修したのであつた。

(つづく)

記録

龍王山に登る

昭和四十九年、羊頭初歩きの記

毎年のことながら佐伯史談会は、初歩き、と称して、新年まず山
に登ることにしてゐる。今年は一月初二日朝、弥生町の陣田に集合、歩
いて陣田に入り、慶の古塔などを見て、飯敷をとのえ、それから水直
村との境にそびえてゐる龍王山に登つた。

この山は、地圖では「左間ヶ岳」と出ており、標高は三三八山、けして
高い山ではないが、佐伯からながめると西の空に黒々とそびえ、まず「か
つ、いい山」であり、きれいに尖つた山頂にはNHKのテレビ塔がある
が、そこには昔から八丈龍王をまつてゐるので、まわりの村々では龍
王山(その呼びかたも誤つて「小お、う、さん」という)と呼んでゐる。

午前九時半、細田の村を後にして一行の頼蝕丸は、高木・子川・鎌
田・五十川・神田・藤間田・平川・南沢・深矢・倉西・清田・羽柴・五十
川・市野瀬・加藤・同子息・宇目所から軸丸氏、はるばる遠くの別荘から
見塩氏の総勢十八人、しかも快晴無風、なかなかの盛況である。

森やかに語りながら細田郡落から林道をたどる。手入丸のよく
行き届いた杉林を右左に見ながら、三十分ばかり登ると小さな尾根に出た。
すると視界が急に開けて、江良も祇園ま
ど切畑の村界がはるかに見える。そこらに登
りつづけると坂道はひどくなる。見上げると
目指すテレビ塔が頭の上は高々とそびえ
ていて、またかなり高い。八合目ほどであ
るか。

ここで道は大きく左にめぐつて、しばらく
登つたら、整地の跡もま少し、広場
に出た。すると、すぐ眼下に水直村が明
るく開けてすばらしい景観であつた。

真正面はるかに鹿傘礼(冠岳一六二七)

